

# アウグスティヌス『告白』第10巻における

## 自己欺瞞の理解

---

佐藤 真基子

### 序

アウグスティヌスは嘘を主題として396年に『嘘論 (*De mendacio*)』を著している。本書において彼は、「嘘についての問題は大きな問題である」と述べた上で、はじめに、「何が嘘であるか」の探求を展開する。そして、「騙そうとする意志をもって偽を告げること」は明らかに嘘とみなしうるという見解を提示したところで、「何が嘘であるか」の探求をいったん終える。しかし、探求の決着がついたのではない。「騙そうとする意志をもって偽を告げること」が嘘であるとしても、それだけが嘘であるのではない。では何をもって私たちは、ある行為が嘘であるか否かを判断できるのか。この問題について『嘘論』では、「何が嘘であるか」、「嘘をつくことはときに有益であるか」の検討の後に、その最終部の議論において、真理を愛し求める意志の有無に、嘘か否かを判断する根拠があるという考えが必ずしも明示的でないが示されている。

この、人間の意志のあり方に「嘘」の成立する根拠を見出す考えは、『嘘論』執筆以降、アウグスティヌスにおいてさらに深化し、独自の人間観を形成していると思われる。それを読み取ることができるのは、『告白』第10巻の議論である。本稿では、『告白』第10巻第41章66節で語られる、「嘘を所有したいと望む（意志する）(uelle possidere mendacium)」という表現の分析を通して、自らが自らを欺く自己欺瞞のあり方にアウグスティヌスが注目していること、そして自己欺瞞の可能性を免れ得ないものとして人間を理解する考えが、彼のキリスト理解に密接に関係していることを示す。

## 1 「嘘を所有したいと望む」とはいかなることか

『告白』第 10 卷第 41 章 66 節においてアウグスティヌスは次のように述べている。

あなたは万物をこえたところで司る真理です。それなのに私は欲張って、あなたを失いたくはなかったけれども、あなたといっしょに嘘を所有したいと望みました。それはちょうど、何が真実であるかを自分が知らないで偽りを語りたいとは誰も望まないのと同様です。それで私はあなたを失いました。あなたは嘘といっしょに所有されることをよしとしないのですから。

tu es ueritas super omnia praesidens. at ego per auaritiam meam non amittere te uolui, sed uolui tecum possidere mendacium, sicut nemo uult ita falsum dicere, ut nesciat ipse, quid uerum sit. itaque amisi te, quia non dignaris cum mendacio possideri.<sup>1)</sup>

この言明においてアウグスティヌスは、自らが真理を失った原因が、真理とともに「嘘を所有したいと望んだ」ことにあるとみなしている。「嘘を所有したいと望んだ」とは、いかなる事態をさして言われているのであろうか。嘘をつこうとしたということであろうか。しかし、嘘をつく (mentiri) でも嘘を語る (mendacium dicere) でもなく、「嘘を所有する」という表現は一般的ではない。しかも、「嘘」という言葉自体、第 10 巻において上記言明が初出であり、本巻の先行する言述の中で、アウグスティヌスが誰かに嘘をつこうとしたという告白はなされていない。したがって、嘘をつこうとしたということであると仮定しても、いつのいかなる事態であるかは必ずしも明らかでない。また、本巻の冒頭では、「真理をなしたい」と宣言した上で告白をはじめている<sup>2)</sup>。した

1) 本稿では、『告白』第 10 巻 41 章については、本文中にラテン語原文を示す。テキストは M. Skutella (éd.), *Les Confessions, Bibliothèque Augustinienne* 14, Paris: Études Augustiniennes, 1996.

2) *Conf.* 10, 1, 1 “uolo eam facere in corde meo coram te in confessione, in stilo autem meo coram multis testibus”. また、「愛が彼らに語ってくれる。告白する私が、私について嘘をつかないということ (dicit enim eis caritas, qua boni sunt, non mentiri me de me

がって、嘘の告白をしたということであるとも考えられない。

あるいはここで言われている「嘘」は、アウグスティヌスが失ったという「真理」と対照的な概念であって、「虚偽 (falsitas)」あるいは「偽り (falsum)」と同義であろうか。じっさい諸訳では、上記引用中の mendacium と falsum を区別していない訳も多い。しかしそうであるとしても、「虚偽」を所有したいと望むということが具体的にいかなることであるか、「真理」との対照性が明示される「虚偽」という言葉を用いずに「嘘」と表現するところに、アウグスティヌスの意図があるのか、意図があるとすればいかなるものかについては疑問が残る。我々は、アウグスティヌスがいかなる理解にもとづいて「嘘を所有したいと望んだ」と述べているかを分析しよう。

## 2 神に救いを祈ることなしに救われない人間としての自覚

上記言明に至る文脈を確認しよう。上記言明を含む第10巻第41章と、先行する第40章においてアウグスティヌスは、本巻第6章から第39章までの議論をふり返って論じている。まず第40章では、真理である神を自らの内面に探求したこと、そしてその神において日ごろ、ある種の快さをともなう神秘的体験をするが<sup>3)</sup>、その体験が永続しないことを嘆いている。それは、第6章から第29章で論じられた議論の内容と一致するものである。そして、続く第41章冒頭から上記引用の直前までの言説は以下のとおりである。

そこで私は、三種の欲のうちにある自らの罪の病を考察し、救いのためにあなたの右手を呼び求めました。というのも、私は傷ついた心であなたの輝きを見ましたが、退けられた私は、次のように言ったのですから。誰がそこにいられましょう。私はあなたの目の前から投げ出されました<sup>4)</sup>。

---

confitentem)』(10.3.4)とも述べている。アウグスティヌスがこの『告白』という書物を書くとき、意図的な虚構を含めているか否かについては、議論の余地があるが、少なくともこの告白を語る「私」が、嘘をつくことなく正直に語る者であることはたしかである。

3) *Conf.* 10, 40, 65.

4) *Conf.* 10, 41, 66.

ideoque consideravi languores peccatorum meorum in cupiditate triplici et dexteram tuam inuocaui ad salutem meam. uidi enim splendorem tuum corde saucio et reperiens dixi: quis illuc potest? proiectus sum a facie oculorum tuorum.

この言説において「三種の欲」とは、第 10 卷 30 章で「肉の欲、目の欲、世間的野心 (concupiscentia carnis, concupiscentia oculorum, ambitio saeculi)」と言われている、諸感覚に属する欲、好奇心、人から誉められたいという欲のことである。これらの欲に対する自らのあり方を考察し、神ないし「神の右手」に救いを求めたという、第 1 文の内容は、第 30 章から第 39 章で論じられた議論の内容と一致するものである。

では、第 2 文以下、接続詞「というも (enim)」以下で説明されていることは何であるか。一見したところ、「傷ついた心であなたの輝きを見た」という言明においては、何らかの見神体験のことが言われていると思われる<sup>5)</sup>。そしてつづく、「退けられた私は～投げ出されました」という言明においては、その体験が永続せず嘆いたということが言われていると推測される。そうであるとすれば、この接続詞 enim 以下の内容は、先行する第 40 章と同じ内容であって、アウグスティヌスは、見神体験が永続しないので自らの欲のあり方を考察したと説明しているであろうか<sup>6)</sup>。

5) 第 10 卷第 6 章から第 26 章で展開された、真理である神の探求を通して見出された神についてアウグスティヌスは、第 27 章において「あなたは輝いた (splenduisti)」と語っている。「あなたの輝き (splendor tuus)」と共通する語で表現されていることから、「傷ついた心であなたの輝きを見た」という言明においては、この第 10 卷の神探求における見神体験のことが言われていると推測される。しかしアウグスティヌスは回心以前の見神体験についても、光を注がれた体験として語っている (7, 17, 23)。「輝き」と同じ用語を用いているのではないが、光源を見たのではなく、光源から届く光を見た体験として語っている点で、共通している。したがって、ある特定の見神体験のことが言われているのではないと解釈することもできる。「傷ついた心で」という表現については、J. J. O'Donnell (*Augustine: Confessions* 3, Oxford: Clarendon Press, 1992, p. 241) が「あなたはあなたの言葉で私を貫き通したので、私はあなたを愛した (percussisti cor meum verbo tuo et amavi te)」(*Conf.* 10, 6, 8) という言明と関係づけている。この言明は回心直後の時期を告白している第 9 卷で、「あなたはすでにあなたの愛で私たちの心を射抜いた (sagittaueras tu cor nostrum caritate tua)」(*Conf.* 9, 2, 3) と述べていることと同じ事態をさして言われていると考えられる。

6) 文法上は、「傷ついた心であなたの輝きを見た」という言明までを接続詞 enim が導く理由句として読むことも可能である。しかしそのように読むと、諸欲を考察し神に救い

しかし、端的に第40章と同じ内容が述べられているとは思われない。『あなたの目の前から投げ出された』と言った」とは、「詩編」30章23節の言葉である。この言葉についてアウグスティヌスは、『詩編注解』で次のように述べている。

私が告白したからこそ、私が「私はあなたの目の前から投げ出された」と言ったからこそ、高慢に高ぶらず、自らの心を告発して、自らの混乱の中で転がりながらあなたに向かって叫んだからこそ、あなたは私の祈りを聞きとどけてくれました<sup>7)</sup>。

「私が『あなたの目の前から投げ出された』と言った」ということが、告白する行為や高慢を避けるあり方とともに、神による救いに結びつく行為とみなされていることがわかる。「言った」のは、宛先のない嘆きではなく、告白や助けを求める叫びと同様、「私」が「あなた」に宛てて発した、救いを求める祈りであるとアウグスティヌスは考えているのである。

しかも、『詩編注解』の同じ説教の中で彼は、この「詩編」の言葉をペトロの経験と関係づけて説明している。すなわち、主が水の上を歩くのを見て恐れたペトロが、本当の主であることを確かめるために、水の上を歩いて主のもとへ行くことを命じるよう主に求め、彼は主の命令にしたがって水の上を歩くが、途中で沈みかけて主に助けを求めるという「マタイ福音書」14章22節-33節に記されたペトロの経験である。アウグスティヌスは、途中で沈みかけたペトロが主に助けを求める叫びとして、「あなたの目の前から投げ出された」という「詩編」の言葉を関係づけている<sup>8)</sup>。アウグスティヌスはこの言葉を、神を見る体験の後に、

---

を求めた後に退けられたということになるが、先行する議論においてそうした記述はない。むしろ諸欲を考察する議論の最後でアウグスティヌスは、「私の傷があなたによって癒されると感じる」と述べている(10, 39, 64)。したがって、「退けられた私は、次のように言った」という言明も enim が導く内容に含まれるとみなすべきである。

7) *En. Ps.* 30, en. 2 s. 3, 10.

8) この説明においてアウグスティヌスが引用する詩編の言葉は、「エクスタシスの中で私は、『あなたの目の前から投げ出された』と言った」である。「エクスタシス」という言葉を、彼は神体験にとまなう恍惚状態という意味に限定せず、恐れを意味するものであると

自らが見た神への信仰を確かなものにするための試練の中で発する、神に救いを求める祈りとして理解しているのである。

かくして我々は、上述の『告白』の言明においても、同じ理解をもってこの「詩編」の言葉が引用されていると考えるべきである。じっさい、本書第 10 卷第 6 章から第 39 章において論じられているのは、神を探求する議論を通して神を見出した後に、神に命令を求め、聖書に記された命令にしたがって三種の欲をつつしもうとするが、欲のつつしみを遂行することの困難を自覚して神に救いを求める議論である。神を見る体験をするかぎりでは救いは成就せず、神の命令を受けてそれにしたがって生き、その試練の中で神に救いを求めるとき救われるという、上述の『詩編注解』の議論で提示されていることと同じ理解が、『告白』第 10 卷のこの議論構成に反映していると推測できる。本巻の議論をふり返って論じる第 41 章の議論において、「私は、『あなたの目の前から投げ出された』と言った」という「詩編」の言葉が語られていることも、『詩編注解』で示されていることと同じ理解が背景にあるためであると考えられよう<sup>9)</sup>。

以上のことより、上記第 41 章の言説において接続詞 *enim* が導いている内容は、神ないし神の光を見る非日常的な体験をするがその体験が永続せず嘆いたという、すでに第 40 章で論じられた内容と同じではない<sup>10)</sup>。そうではなくて、アウグスティヌスがここで「詩編」の言葉をもって説明しようとしているのは、神を見る体験をしても神のもとにとどまることができない「私」は、神のもとにとどまることができるようになるための試練を遂行することができない状況に陥り、救いを求めたということである。神に救いを求めるより他に、救われる道がないことが自覚されたということである。しかもアウグスティヌスは、この「詩編」の言葉に、「誰がそこにいられようか」という言葉を加えている。三種の欲についての考察を通して彼は、自身に限らず、多くの人間ある

解釈している。(cf. *En. Ps.* 30, en. 2 s. 1, 2)

9) 以上の考察から、“*dixi*”の内容を“*quis huic est*”までとする読み方(ex. O'Donnell)には同意しない。

10) もとより、三種の欲について考察する理由が、神のもとにとどまりたいのにそれができないからであるという考えは、見神体験の断絶を嘆く第 40 章の内容を受けて第 41 章が *ideoque* という言葉をもって始まっていることにすでに示されている。

いはすべての人間が、神の救いなくしては試練をこえられないあり方をもっているという理解を得ているのである。

### 3 救いを阻む原因としての自己欺瞞

この「あなたの目の前から投げ出された」という言明にひきつづいて語られているのが、本稿冒頭に引用した言説である。この言説においてアウグスティヌスは、「あなたは万物をこえたところで司る真理である」と述べた上で、それを失ったと告白している。「万物をこえたところで」と言われるのは、「あなた」を探究して万物をこえたところにそれを見出す同巻第6章から第26章の考察が念頭にあるためであろう。そうした真理である「あなた」を失うとは、いかなることであろうか。

“*praesidens*”（司る、前に座る）という言葉が付されていることに注目しよう。“*praesidens*”というあり方を真理に関係づけて語る言明は、第26章にもある。神を自らの内面に探求する議論を論じたアウグスティヌスが、「真理よ、あなたはあらゆるところで、あなたに相談するすべての人の前にいて（*praesidens*）、様々なことを相談されても、すべての人に同時に答える<sup>11)</sup>」と語る言明である。この言明においてアウグスティヌスは、問いと答えを繰り返すことによって進めた神探求について、それが、自らが真理に「相談する」という仕方でもなされたものであるという理解を提示している。真理を、人間がそれに「相談する」という仕方でも探求を進めることによって神のもとに至ることを可能にするものとして、位置づけているのである。このとき真理は、相談相手として「前に座り（*prae-sidere*）」、探求を司るものであるから、“*praesidens*”と表現されるのであろう<sup>12)</sup>。

---

11) *Conf.* 10, 26, 37 “*ueritas, ubique praesides omnibus consulentibus te simulque respondes omnibus etiam diuersa consulentibus.*”

12) 『教師論』11, 38における、「内的に精神そのもの前にある真理に相談する（*intus ipsi menti praesidentem consulimus ueritatem*）」という有名な言明においても、“*consulere*”, “*praesidens*”の語が使われている。「相談する」という言葉に、与えられた答えを受け入れるか否かを決めるのは相談者自身であるという理解が反映していることについては、中川純男『存在と知—アウグスティヌス研究』創文社、2000年、132頁。『告白』においても、真理に「相談する」というあり方についての理解は共通していると思われる。Cf. *Conf.* 10, 26, 37 “*liquide tu respondes, sed non liquide omnes audiunt.*”

上記第 41 章の言説においても、真理についての同じ理解にもとづいて、“*praesidens*”と言われていると考えられる。じっさい、三種の欲に対する自らのあり方を考察する、本巻第 30 章からの議論は、自らの内面に神を探求する議論と同様、神のもとに至ることを目的として問答を繰り返すことによって進められたものである<sup>13)</sup>。また、相談する人間に答えを与えるものとして真理を位置づけるとき、その真理を失うことは、答えがわからなくなることでであると推測されるが、じっさいアウグスティヌスは、この三種の欲を考察する議論において、自らにとって自らの欲のあり方がわからない事態を見出している。たとえば食欲について、次のように述べている。

健康にとって十分であるものが、快樂にとっては不足です。しかもしばしば、体のためになおも必要な世話が維持を求めているのか、欲望の快い欺きがひそかに奉仕を求めているのか、不確かなことがあります<sup>14)</sup>。

食欲を抱くとき、それが健康を維持するための欲か快樂を満たすための欲かの区別が、不明なときがあることをアウグスティヌスは指摘している。彼は食欲以外の欲について考察する議論においても、もつべき欲と快樂のための欲の区別のしがたさや、睡眠中や反射的の反応にあらわれる欲のおさえがたさ、今は欲をつつしめていると思われても今後もつつしむことができるという確かさがなくを指摘している<sup>15)</sup>。いずれも、

13) すでに岡部は、第 10 巻における“*ueritas*”の用法を網羅的に分析した上で、その概念が、「問答と理解の相関者」として、さらには「生のあり方を問う自己省察の相関者」としての位置づけをもって理解されていることを明らかにしている。Cf. 岡部由紀子「*Veritatem facere*—『告白 *Confessiones*』第十巻の真理論」、『中世哲学研究 (VERITAS)』第 23 号、京大中世哲学研究会、2004 年、16-32 頁。

14) *Conf.* 10, 31, 44 “nam quod saluti satis est, delectationi parum est, et saepe incertum fit, utrum adhuc necessaria corporis cura subsidium petat an voluptaria cupiditatis fallacia ministerium suppetat.”

15) これら自らの欲のあり方がわからない事態についての言説の中でも、とくに次の言明は有名である。「私はあなたの目において、私にとって問いとなった。そうした私こそが私の病である (in cuius oculis mihi quaestio factus sum, et ipse est languor meus)」(10, 33, 50)



自らの欲のあり方が完全な仕方ではわからないことの指摘である。

以上のことより、我々は、第41節において、“*praesidens*”している真理を失ったとアウグスティヌスが語る時、指し示されている事態を次のように解釈できる。すなわち、アウグスティヌスは、「真理に相談しつつ」、すなわち問答を繰り返す仕方では自らの欲のあり方を探求したが、探求は遂行できず、欲のあり方を解明できなくなったという事態である。

この、真理喪失の原因としてアウグスティヌスが語るのが、「嘘を所有したいと望んだ」ことである。彼は、先の三種の欲を考察する議論の中では、真理喪失、すなわち自らの欲のあり方を解明できなくなったことの原因を何に見出していたのだろうか。上記第31章の引用において、健康のためでなく快楽を満たそうとする食欲について、「欺く (*fallere*)」という言葉が用いられていることに注目しよう。同様の表現は、食欲以外の欲について説明するときも用いられている。匂いに対する欲については、自己を吟味してみるに、過剰な欲を抱くことはないと思われるが、しかしそのように判断している自分は「欺かれているかもしれない」と述べている<sup>16)</sup>。聴くことに対する欲については、「私の肉の喜びは、それに弱った精神を引き渡してはならないが、しばしば私を欺く<sup>17)</sup>」と語り、自らが欺かれることによって、満たすべきでない欲を満たして喜ぶ可能性があることを指摘している。

これらそれぞれの説明において「欺く」主体は、快楽ないし快楽を求める欲や、自らのあり方を把握する理解力である。アウグスティヌスは、たとえば『告白』第8巻の議論で示されているように、よい意志にそむく意志も別の本性に由来するものではなく「私」に他ならないと考えている<sup>18)</sup>。したがって、欲のあり方を吟味する議論において、彼が、「欺く」ないし「欺かれる」と語る時、それは「私」が「私」を欺くという自己欺瞞を指摘しているといえよう。じっさい、名誉欲について考察

16) Cf. *Conf.* 10, 32, 48 “de inlecebra odorum non satago nimis: cum absunt, non requiro, cum adsunt, non respuo, paratus eis etiam semper carere. ita mihi uideo; forsitan fallar.”

17) *Conf.* 10, 33, 49 “sed delectatio carnis meae, cui mentem enervandam non oportet dari, saepe me fallit”.

18) Cf. *Conf.* 8, 10, 22.

する議論では、自らの欲のあり方がわからないことについて、「私は自らを騙して、あなたの前で真実をなしていないということになるのか」と述べている<sup>19)</sup>。アウグスティヌスは、自己認識の限界を、自らの内的分裂に由来する自己欺瞞として理解しているのである。

かくして、自らの欲のあり方が分からないことの原因、すなわち真理喪失の原因を、アウグスティヌスは自己欺瞞に見出している。したがって、真理喪失の原因として第 41 章で語られる、「嘘を所有したいと望んだ」とは、自己欺瞞のことであると解釈できる。

#### 4 「所有」の概念

それでは、いかなる理解に基づいて、自己欺瞞が「嘘を所有したいと望む」と表現されるのか。「所有する」という言葉に注目しよう。第 10 巻においてアウグスティヌスは、神ないし主に対して 2 度、「所有してください」と呼びかけている。第 1 章の、「(あなたが) しみやしわもなく、持ち、所有してください (habeas et possideas sine macula et ruga)<sup>20)</sup>」という言明と、第 36 章の、「あなたこそが私たちを所有してください (tu nos posside)<sup>21)</sup>」という言明である。いずれも自らが神によって「所有」されることを請うている。そして、上記第 41 章において「真理」と呼ばれている「あなた」も、第 1 章と第 36 章で「所有してください」と呼びかけられている「あなた」と同じ、神ないし主である。そして本章では、嘘を「あなた」とともに所有したいと望んだと述べているから、「あなた」は所有の対象である。したがって、本巻の議論においてアウグスティヌスは、神と自分を、「所有」し「所有」されるという関係において捉えているといえる。

19) Cf. *Conf.* 10, 37, 62 “etiamne id restat, ut ipse me seducam et uerum non faciam coram te in corde et lingua mea?” これは聖書の記述を念頭において語られた言葉である。cf. I Io. 1, 8 “ipsi nos seducimus et ueritas in nobis non est”。

20) 動詞の二人称で呼びかけている相手は、この文に先行する箇所では呼格で示されている「私の魂の力 (uirtus animae meae)」であるが、この「私の魂の力」は、文脈から、神ないしキリストのことが念頭におかれていると考えられる。動詞 habere と possidere の目的語は「私の魂 (anima mea)」である。

21) この言明は「イザヤ書」26:13 の記事が念頭にあると考えられる。下記『詩編注解』32. en. 2 s. 2, 18 でも、この同じ “nos posside” というイザヤの発言が言及されている。

人が神によって所有され、且つ神を所有するとはいかなる考えか。『詩編注解』第32編の議論をみてみよう。本編第2注解第2説教15節から18節においてアウグスティヌスは、「詩編」32章12節の「いかに幸いなことか、主を自らの神とする民、主が自らのために、嗣業として選んだ国民は<sup>22)</sup>」という言説について説明している。この言説自体に「所有」という言葉が使われているのではないが、アウグスティヌスはこの記事について次のように、「所有」の概念を用いて説明する。

この方（神）は私たちの嗣業であり、私たちの所有でありましょう。あるいはもしかして、神は主であり創造者であるのに、私たちが神を所有するなどと言うのは軽率でしょうか。いやそれは軽率ではありません<sup>23)</sup>。

あなたは民がかの方（神）を所有すると聞きました。「いかに幸いなことか、主を自らの神とする民は」というところです。神もまたその民を所有すると聞きなさい。「主が嗣業として選んだ国民」とあるのですから<sup>24)</sup>。

アウグスティヌスが、相続、ないし相続する土地を意味する「嗣業 (haereditas)」という言葉と、本来土地の所有を意味する「所有 (possidere/possessio)」を関係づけて論じていることがわかる<sup>25)</sup>。たしかに haereditas と possessio は近接した概念であり、haereditas の動詞の代わりに possidere を用いているとも考えられる<sup>26)</sup>。アウグスティヌスが

22) Ps. 32:12 “beata gens cuius dominus deus eius populus quem elegit in hereditatem sibi” 「嗣業」という訳語は新共同訳に従った。

23) En. Ps. 32. en. 2 s. 2, 17 “ipse sit haereditas nostra, possessio nostra. an forte temere dicimus faciendo nobis deum possessionem, cum sit dominus, cum sit creator? non est ista temeritati.”

24) En. Ps. 32. en. 2 s. 2, 18 “audistis quia gens possidet eum: beata gens, cuius est dominus deus eorum. audite quia et ille possidet illam: populus quem elegit dominus in haereditatem sibi.”

25) 『詩編注解』において、聖書の当該記事に「所有」の語がなくても「所有」の語を用いて説明する議論は、他編の注解にも多い。

26) アウグスティヌスが引用している聖書では“possidere”と訳されている言葉が、ウルガタでは“hereditate capere”と訳されている例もある。例えば「詩編」36:34。

神と人を「所有」の概念によって関係づけて語るとき、その背景に、旧約聖書に由来する「嗣業」についての理解があると推測できよう<sup>27)</sup>。

では聖書を通してアウグスティヌスが得ている「所有」の概念とはどのようなものか。上記引用では、「主を自らの神とする民は幸せである」という聖書の言葉について、それは「民が神を所有する」ことであると説明している。アウグスティヌスが、神を「所有する」ということに、「幸せである」ということを含めて理解していることが読み取れる。しかも彼は同じ説教の中で、豊かな土地の所有者は人に幸せだと評されるものであると論じている<sup>28)</sup>。豊かな土地を「所有する」ということが、一般に、所有者にとって幸福や喜びをとまなうものとして理解されることに注目しているのである。これらの説明から、アウグスティヌスにおいて「所有」という言葉は、例えば *habere* や *accipere* と代替可能であるような「持つ」という意味で用いられているかぎりではなく、幸福や喜びの実現を含意していると解釈できる<sup>29)</sup>。しかも、その幸福や喜びは、「嗣業」にもとづくものとして考えられているのであるから、神が人間に約束する、神のもとにおける幸福や喜びのことであるといえる。

以上のことから、『告白』第 10 卷第 41 章においてアウグスティヌスが、真理である「あなた」を「所有」の対象として提示するときも、神によって約束された、神のもとにおける幸福や喜びの実現を含意していると考えられよう。事実アウグスティヌスは、自らの内面に神を探求する本巻の議論において、神を探求するときには幸福な生を探求していると説明している<sup>30)</sup>。そして、幸福な生とは神に由来する喜びであり、そ

27) 「嗣業」については「申命記」、「レビ記」等で語られる。

28) Cf. *En. Ps.* 32. en. 2 s. 2, 18.

29) 上述第 10 卷第 1 章の「しみもしわもなく、持ち、所有してください」という言明でも、続けて、「それこそが私の希望です。だからこそ私は語り、健全な喜びを喜ぶときその希望において喜びます」と述べられている。「所有」の実現が、自らにとって喜びであるという理解が示されているのである。「しみもしわもなく」とは、『エフェソ書』5:27 の言葉であるが、聖書では「しみもしわも持たない教会 (*ecclesiam non habentem maculam aut rugam*)」という表記であって、動詞 *possidere* は使われていない。『告白』以外の著作でアウグスティヌスがこの聖書箇所を引用するときにも、動詞 *possidere* は含まれていない (cf. *Retr.* 1, 6, 5)。したがって、この第 10 卷で「所有する (*possidere*)」という言葉は、意図して挿入されていると思われる。

30) Cf. *Conf.* 10, 26, 37 「私は私の神であるあなたを探求するとき、幸福な生を探求しています。(cum enim te, deum meum, quaero, uitam beatam quaero.)」

れは真理に由来する喜び (gaudium de ueritate) であると述べている<sup>31)</sup>。また、その議論をふり返って論じる第40章では、自らの見神体験を、内面的な喜びをともなう体験として語っている<sup>32)</sup>。

かくして我々は、「真理を所有する」とは、幸福な生における喜びを喜ぶこと、真理に由来する真の喜びを喜ぶことであると解釈できる。アウグスティヌスにとって真理が探求の目的であることは、哲学諸派の議論と共有するところであるが、彼はその真理の概念に「所有」の語を関係づけることによって、探求の目的が喜びをともなうものであるとの理解を示しているのである。

## 5 「嘘」を所有したいと望む人間

さて、真の喜び、いわば喜ぶべき喜びを喜ぶことが「真理を所有する」ことであるならば、喜ぶべき喜びを喜ぶたいと望むことは「真理を所有したいと望む」ことである。それに対して、喜ぶべき喜び以外の喜びを喜ぶたいと望むことは、「真理」に対立する概念として「虚偽」の語を用いて、「虚偽を所有したいと望む」と表現しうる<sup>33)</sup>。

この、「虚偽を所有したいと望む」ことと、「嘘を所有したいと望む」ことは、同じであろうか。たしかに自己欺瞞の目的は、喜ぶべきでない

31) Cf. *Conf.* 10, 22, 32-23, 33. 32節で提示された、幸福な生を求めるとき人は本当の喜び (gaudium uerum) を求めているという議論にもとづいて、“uerum” がそこから由来する，“ueritas” の概念が第33節で導入されている。“de ueritate” という表現は、32節の、「幸福な生とは、あなたに向けて喜び、あなたに由来する喜び、あなたのために喜ぶことである (et ipsa est beata uita, gaudere ad te, de te, propter te)」という言明における “de te” に一致するものであり、それは、自らの魂は「あなた」のおかげで (de te) 生きるから、自らの魂が生きるために「あなた」を求める、と論じる第29章における表現と一致するものである。Cf. 10, 20, 29 “quaeram te, ut uiuat anima mea. uiuit enim corpus meum de anima mea et uiuit anima mea de te”。

32) Cf. 本稿注4、本書9, 10, 23-25で語られているオスティアにおける神秘体験についても、その体験が持続して「内的な喜び」の中に保たれるときが神のもとに至るときであるという考えを提示している。それに対して、*Conf.* 7, 17, 16; 23において回心以前の神秘体験について語られているが、光を見る体験として語られ、快さを表す表現はなく、喜びをともなうものとして表現されていない。

33) じっさいアウグスティヌスは、幸福な生が真理に由来する喜びであることを説明する議論において、人は「虚偽によって喜ぶよりも真理によって喜ぶたいと望む」と述べ、喜ぶべき喜びを喜ぶことに対立するあり方を、「虚偽」の語を用いて表現している。Cf. *Conf.* 10, 22, 32 “nam quaero ab omnibus utrum malint de ueritate quam de falsitate gaudere. tam non dubitant dicere de ueritate se malle, quam non dubitant dicere beatos esse se uelle”。

喜びを喜ぶことにあるから、そのかぎりで自己欺瞞は「虚偽を所有したいと望む」ことであるといえる。しかしアウグスティヌスは「嘘を所有したいと望む」ことを真理喪失の原因として提示しており、それが、満たすべきでない欲を抱きながらも、すなわち虚偽を所有したいと望みながらも、それを自覚できないあり方であることは、本稿3で明らかにしたとおりである。

したがって、「嘘を所有したいと望む」ことは「虚偽を所有したいと望む」ことに含まれるが、同じではない。アウグスティヌスは、「嘘を所有したいと望む」という言明において、「嘘」という言葉を「虚偽」とは区別して意図して用いている。彼は、「嘘」を言語行為として理解するかぎりではなく、救いを求めながらも自らの救いを阻むという、人間が避けがたくもっている生のあり方として理解しているのである。

## 6 自己欺瞞の自覚とキリスト理解

自らの欲のあり方が完全な仕方ではわからないことの原因を、自己欺瞞に帰す理解の背景には、いかなる人間観があるのだろうか。たとえば、自己欺瞞ではなく理解力や意志の力の不足にその原因があるとみなし、それらの力の向上によって救いが成就するという考えもありえよう。この考えにおいては、人間は自らの救いについて自立的であるという理解があると思われる。しかしアウグスティヌスのように、自己欺瞞にその原因を帰す考えにおいては、自力では救いに至れないという理解があると思われる。というのも、自らが欲を完全な仕方ではつしめていてと判断するとしても、自己欺瞞の可能性をもつかぎり、人はその判断の正しさの根拠を自らの内におくことはできないからである<sup>34)</sup>。

とはいえアウグスティヌスは、神のもとで真の喜びを享受することが不可能であると諦めているのではない。本稿2で明らかにしたように、第41章において彼は、「私は『あなたの目の前から投げ出された』と言った」という詩編の言葉を、救いを求める祈りとして提示している。そして、「嘘を所有しようと望んだ」ために「(真理である)あなたを失っ

34) 自らに原因がありながら、自力では克服しえない落ち度とは罪に他ならない。罪は罪人自らの判断で免れうるものではなく、罪から免れる道は、人が罪を認め、再度罪に陥ることのないように努めつつ、自分以外の裁き手に許しを請うより他にない。

た」という説明を含む、本稿冒頭に引用した言説も、先の詩編の言葉とならんで、「言った」ことの内容として読むことが文法的にも可能である。すなわち、この言説全体も、救いを求める祈りであると解釈することができるのである<sup>35)</sup>。また、もしこの言説を「言った」ことの内容に含めないとしても、「あなたを失った」という言明においても「あなたの目の前から投げ出された」という言明と同じく、欲のつつしみを遂行できない事態が語られているのであるから、この言説は救いを求める祈りの内容を語りなおしている言説であると解釈できる。アウグスティヌスは、自己欺瞞を自覚して神の救いを求めることに、救いの実現につながる積極的な意味を見出しているといえるであろう。

では、自己欺瞞を自覚して神に救いを求めることは、いかにして救いの実現につながると考えられるのか。アウグスティヌスが、自らの欲のあり方について、「嘘」という言語行為の比喩で語っていることに注目しよう。嘘は、この第41章の言説でアウグスティヌス自身が語っているように、何が真実であるかを知りながら、あるいはあることがらが真実であると信じながら、虚偽を語ることである。すなわち我々は、知や信の対象として真理と関係することなしに嘘をつくことはできない。このことに注目するならば、自己欺瞞の自覚は、正しさの根拠が自らのもたないことを認めるにとどまらないであろう。その自覚は、正しさの根拠である真理が、自らをこえたところに存在すると認めること、そしてそれを自らが愛し求めているとの自覚を含む<sup>36)</sup>。この理解にたつとき、自己欺瞞から免れえない人間にとって真理である神との邂逅は、その自らのあり方を告白し祈る言葉のうちにこそある。本稿冒頭に引用した第41章の言説においてアウグスティヌスが、「嘘を所有しようと望んだ」という言葉を祈りの言葉として、ないし祈りの内容の語りなおしとして提示していることは、こうした理解に基づくものであると解釈できるであろう。

---

35) dixi 以下のどの言明までが「言った」内容であるかは必ずしも判明でなく、諸校訂版、諸訳において解釈が分かれている。唯一 I. Capello (*S. Aurelii Augustini Confessionum, libri XIII*, Taurini: Domus Editorialis Marietti, 1948, pp. 412-413) は、本稿冒頭で引用した言明全体も「言った」内容に含むとみなす校訂を提示している。

36) Cf. *Conf.* 10, 23, 33 "amant enim et ipsam (veritatem) quia falli nolunt".

さて、この第 41 章の議論にひきつづく第 42, 43 章では、真理と自らの断絶をとりなす者はイエスであることが論じられて、本書第 10 巻の議論がしめくくられている。一見唐突に神学的議論に移行しているかに見える議論展開であるが、本稿で我々が辿ったアウグスティヌスの思考を考えると、このキリスト論は先行する第 41 章の議論と密接に関係するものとして説明しうる。なぜなら、アウグスティヌスが第 42, 43 章で述べるのは、イエスが正しい者であるにもかかわらず死を受け入れたこと、「十字架の死にいたるまで」父なる神にしたがったこと、人々が彼から学ぶべきは「謙遜」であることである。このことは、第 41 章の議論から我々が読み取った、正しさの根拠が自らのもとにあると認めない謙遜の態度の内にこそ、真理なる神との邂逅があるとの人間観と一致するものである。

アウグスティヌスは、かつては人間としてのイエス・キリストを認めながらも、その卓越性は、「すぐれた人間本性と知恵の完全な分有」にあると理解していたと述べている<sup>37)</sup>。当時のアウグスティヌスは、謙遜や受難の意味に注目していなかったと思われる。彼が謙遜や受難の意味に注目するに至った経緯については、さらに検討の余地があるが、少なくとも、自己欺瞞の可能性を免れ得ない人間のあり方についての洞察が、人間の救いがいかにして可能であるかについての理解の変化に関係していること、そしてそのことが、救い主であるキリストについての理解の変化に寄与していることは、我々が分析した『告白』第 10 巻の議論から読み取りうる。

## 結 語

以上のように、「嘘を所有したいと望んだ」というアウグスティヌスの表現においてわれわれは、真理に由来する喜びを愛し求めながらも自己欺瞞に陥る可能性をもつ人間存在の弱さと、その弱さの自覚の内にこそ真理が人間の前にあらわれるという逆説を読み取ることができる。人間の意志のあり方に「嘘」の成立する根拠を見出す、すでに『嘘論』で提示されていた考えは、たしかに『告白』においても引継がれている。

---

37) Cf. *Conf.* 7, 19, 25.



しかし、「嘘」を自己欺瞞のあり方と結びつけ、自己欺瞞の自覚と、その自覚にもとづき救いを求める祈りの言葉を発することに救いの可能性を見出す理解は、『嘘論』では明示されていない。この『告白』と『嘘論』の語り方の違いが、人間理解の相違にもとづくものであるのか、書物の主題の相違にもとづくものであるかは、本稿の分析の限りでは明らかでない。「嘘」をめぐる彼の理解の深化の過程を更に検討することは、彼の人間理解の形成過程を明らかにすることに貢献するであろう。